

Q 終わりになき日常を生きるって意味はあるか？

1 宮台さんは「終わりになき日常を生きる」って言うけど、夢や希望のない時代をそれでも生きると言うのなら、いったい僕らは何のために生きればいいのか？ 生まれてきた意味なんてないじゃないですか。(32歳・男・会社員・YH)

2 映画『もののけ姫』を見ましたが、「生きるー」というメッセージがどうしても理解できませんでした。ただ「生きる」って言われても、突然「死ね」って言われるのと同じくらい理不尽だと思います。何で生きなきゃいけないのよ！ 大ヒット映画だけど、見た人たちはどう思っているのでしょうか。それともおかしなのは私のほう？ (20歳・女・学生・KE)



拙著『サブカルチャー神話解体』（共著・パルコ出版）で、AV女優の出演動機の変化を紹介したことがあります。十年ほど前には黒木香など高偏差値大学出身の「私探し派」のAVギャルが目立ちましたが、九〇年代に入るとこうした動機で出演する子は珍しくなります。旅行に行く金が少し足りないから出演する、みたいな気楽な「あっけらかんギャル」が急増してきます。売春する女性も同じ傾向で、主婦やOLだと、「私探し派」のA・C系が多数派ですが、年少になると「まったり派」のコギャル系が増えます。

「私探し派」から「まったり派」へ。この変化は、①世界や自分の究極の意味を与えると称する「危険な宗教」に騙されない若者の増加を意味すると同時に、②逆にこうした変化に追いつめられた若者たちが「危険な宗教」に吸引される可能性が増えることも意味する――。

オウム完全克服マニュアルの副題を付した『終わりになき日常を生きる』で、私はそう書きました。「まったり生きる」というメッセージは、むしろ「まったり生きるられない人々に向けられたもので、「まったり生きるられない自分を相対化してもらおう」ためのものでした。

でも「まったり」には、地面にへたりこんで居眠りをするようなイメージがあるので、「そんな脳死みたいな人生はイヤだ」と一部で反発を呼びました。無理ありません。しかし私が言いたかった「まったり＝脱力した生」とは、脳死のような人生とはまったく違います。

### 意味にするのはただの弱者だ

「まったり生きる」とは、オレは何者なのか、世界とは何なのか、なぜ生きるのか、と「意味を問う」作法の、反対を言います。これを、「意味」ではなく「強度」を享受する生き方、と言い換えることもできるでしょう。

「意味」と「強度」とは、ポスト構造主義哲学の対概念ですが、元来ニーチェにルーツがあります。彼は、良き生を生きられない輩が、自分と世界の隙間を埋め合わせるべく「意味」を求めると考え、そうした意味を求める「弱者」はキリスト教に淵源<sup>えんげん</sup>すると見なしました。

要はこういうこと。料理がおいしいのは意味があるからではありません。レシビに意味があるからこのラーメンはおいしいという奴がいたらアホです（昨今のワインブームにこういうアホが目立ちます）。踊って気持ちがいいのも、踊りに意味があるからじゃない。端的に楽しい。

実は天皇もそうです。歴史教科書（笑）を通じて偉業に納得して「なるほど天皇は偉い」と考えるなら、偉業をなせば誰でも偉いものだから、天皇を侮辱したことになる。保田與重郎ではありませんが、天皇が恥ずかしい存在でも、ただただ頭を垂れる。それが「真性右翼」です。

わが師匠・小室直樹先生は「真性右翼」なのでこのことを熟知しておられます。真性右翼は天皇の「意味」ではなく「強度」に帰依する。だから真性右翼は（心情的理解は別にして）論

理的には「新しい歴史教科書をつくる会」とは袂を分かちます。

人類は長らく「意味」ではなく「強度」を生きてきました。どんな共同体にも祭儀まつりやイケニ工儀式があるのはそのことに関係します。ところがキリスト教以降、あるいは少なくとも近代以降「意味」(目的合理)が追求されるようになります。しかし人類史的には例外なのです。

近代が成熟し、欠落の共有がなくなるがゆえに夢の共有もなくなると、未来のために現在を、社会のために自分を犠牲にする「意味追求的な生き方」は廃れ、「今ここ」を楽しむ「強度を追求する生き方」が重要になります。「意味」から「強度」へ。

### 「成熟社会」は伝統に回帰する

そうやって私たちは今まさに、人類伝統のあり方に戻ろうとしています。ただし、かつてとは違って、極めて複雑で不透明な社会システムに支えられながらですが。問題をご理解いただくために、ここで新たに禁止薬物の例を取り上げてみましょう。

精神活動に影響をもたらす薬物が禁止されたのは、人類史的にはごく最近のことです。具体的には、阿片戦争でのイギリスによる中国愚民化政策のあとで、移民中国人の阿片吸引の悪癖から自国民を守るために、アメリカで持ち出されたのが最初でした。

問題は、その後になって、二十世紀半ばにかけて近代国家が例外なく禁止薬物を設定した理

由です。私はこう考えています。「私たちの複雑な社会システムは、私たちの知覚・感覚を一定の枠内に制限することによって初めて可能になる」ということですね。

私たちが文化(習得プログラム)を持つのは本能(生得プログラム)が未熟な状態に制約されるからだという「ネオテニー説」が定説ですが、構造はよく似ています。私たちが複雑な社会システムを頼るのは、各個人の知覚感覚能力が未解放な状態に制約されることに対応する。

ところが成熟した欧米社会ではかつて厳しく禁止された薬物が、昨今条件つきながら解禁される傾向にあります。複雑な社会システムの「形成途上」で必要とされた措置が、システム「成熟後」に必ずしも必要なくなり、伝統復帰とも言える政策措置に移行するというわけです。

分かりやすく言えば近代社会はシステム形成途上では人々に「意味追求」を促すという形で、実はシステムに都合のいい行動だけを選別していました。でもシステムが完成すると、人々は自分としての自分に立ち返るようになります。すなわち「意味」から「強度」へ。

### 観念から関係へ——愛のモード

「本当の愛」から「愛のモード」へという、以前述べた問題も密接に関係します。ここでは映画の例で復習します。日本映画は、ここ数年やっとヨーロッパ映画の水準に近づいてきました。「観念」ではなく「関係」を描くようになってきたからです。

ヨーロッパ映画は基本的に、世界は殺伐としている、人間は決して分かり合えない、という前提から始まります。人は、現実を虚構化・日常を演劇化して、何とか享受可能なものを見出して生きるしかありません。そこに多様なツールが持ち出されます。

たとえば「愛」。愛は不可能です。でも、可能であるかのように生きることができると、そうすれば、そこそこ果実は得られ、その果実さえあれば、まがりなりにも生きていくことはできます。確かにそこまでして生きる「意味がある」のかどうかは疑問です。

でも「意味がないじゃないか」とは誰も言わない。皆がそうやって生きているという「優しい共了解」があります。だから愛は、一種のゲームになります。「意味はないけど強度はある」、そんな生き方が、こうして共犯的に可能になるわけです。

だからヨーロッパ映画では、しばしば夢か現実か分からないような「関係」が主題になります。「関係」は個人の自由にならない複雑性の次元に属します。だからこそ享受に値するとい

うわけです。ところが日本映画は専ら「オレにとつての世界」、つまり「観念」が主題でした。オレとは、監督や主人公や観客ですが、でも監督が、主人公が、世界をどう観念しているかなんてどうでもいいと思いませんか。すべての観念がアーカイブ（書庫）に収納された成熟社会では、たかだか一人が抱く観念なんて、どうせ陳腐ですから、誰の関心も呼びません。

ところが少女マンガの影響を強く受けた岩井俊二などを皮切りに、日本映画でもようやく

「観念」「自意識」ではなく「関係」を描く映画が出てきました。遡れば、七〇年代半ば以降の少女マンガで初めて「自意識」ではなく「関係」を描く大衆メディアが登場したんですよ。

大人気の『キューティ・コミック』などを読むと、理由もないのに性的関係を結び、意味も分からないまま関係を享受することが、すべての作品で奨励（笑）されています。この流れは最近男の子マンガにも流入してきました。やはり、「意味」から「強度」へ――。

### あなたの人生に一切意味はない

男性会社員Y日さん。おっしゃる通り、夢や希望のない時代、つまり「意味」を見つけることができない時代です。あなたが生まれてきた意味はありません。あなたが何かのために生きつつも、途中で梯子を外されて失楽園状態（笑）になることを、私が保証しましょう。

実際まわりにそんな人があふれていませんか。もうお分かりでしょう。何かのために「意味ある生」を生きなければならぬ理由はない。ニーチェ的に言えば、あなたは意味が見つからないから良き生を送れないのではなく、良き生を送れていないから意味を求めているのです。

女子学生KEさん。同時期に公開された庵野秀明『ジ・エンド・オブ・エヴァンゲリオン』まごころを君に』のキャッチコピーが「みんな死んでしまえばいいのに」だったのは偶然ではありません。両方とも生きても死んでも「意味」がないという共通の現実に対応しています。

『ものけ姫』を見た人は、「生きてるだけで地球の迷惑」なぐらいだから、意味があるどころか、生が（従って死が）「端的な事実」であるという印象を受けたでしょう。『エヴァー』を見た人も、死が（従って生が）「端的な事実」であるという印象を受けたはずだ。

結局、宮崎駿は「世界と向き合え!」、庵野は「他者と向き合え!」で終わるんですが、その意味で「関係」でなく「観念」を描く日本映画の伝統そのものですが、「意味」があるからでなく、世界や他者の複雑性が「強度」を与えるからという結論で共通します。

《何のために生きればいいのか?》と問うYHさん。《何で生きなきゃいけないのよ!》と問うKEさん。答えは自明でしょう。生きることの意味（何のため）もクソもないし、まして、生きなきゃいけない理由なんてない。生は端的に無意味です。「意味」から「強度」へ。

といったメッセージを、私はあまりにも当たり前だと思ったので『終わらなき日常を生きる』以外ではもはや書いていませんが、大学の講義などでは折に触れて若い人たちに送り続けてきます。《こちが予想外のことが生じつつあります。

私の良き読者つまり「無意味を納得し切った」はずの読者から、私の知る限りでも複数の自殺者が出てくるのです。最初は二年前、国家公務員一種試験に受かり大蔵入りが内定していた東大女子学生。

そして『ダ・ヴィンチ』九八年八月号巻頭の自殺特集のA君（藤井誠二氏との共著『美しき少年の理由なき自殺』のS君を指す）。問題は無意味を納得した「後」にあるようです。続きは別の質問をもとに次回お話しします。



Q 生きる意味が見つからなければ自殺するしかないのか？

ねこぢるさんが自殺しました。ショックです。世界が無意味であることを描き続けるねこぢるさんが、それでも現に生きてマンガを描いていたからこそ、「ねこぢるさんが生きていくくらいだから世界に何かあるのかも」と望みを与えられてたの……。僕も死ぬしかないような気がします。(24歳・男・フリーター・WO)

A

前回、「生きる意味が見つからない」と問う質問者の方々に、意味が見つからないから良き生を送れないのではなく、良き生を送れないから意味を求めているのだ、と回答しました。もちろん「生の歓喜」を礼賛するニーチェ的な言い方です。

「しかし」逆説に満ちています。「意味ある生でなく、濃密な生を生きよ」「意味から強度へ」。この言葉聞き、あるいはニーチェの本を読んで、無意味な生を癒される読者は、十分に意味的な存在であり、ニーチェ的な意味で軽蔑対象になります。

「言葉を頼るな」という言葉を頼って癒される――。この種の逆説は「唯々諸々と従わずに自己決定しろ」という命令に唯々諸々と従うといった形も含め、言葉（意味）の機能に自己言及する言葉（意味）にツキモノです。

ただしこうした逆説は、現実には多様な文脈に覆い隠され、やり過ぎられます。だから回答としてはそこそこ実効的です。実際、指摘するまで逆説に気がつかない方も多い。しかし、むしろそれをやり過ぎさないことで、本質的な回答が得られます。

### 近代システムの「二重の困難」

原初的な社会では 昨日あるように今日もあり、今日あるように明日もあるといった現実構

成の自明さが共有されています。言葉は自明さに補完されている分、大きな負担を背負っておらず、一部生活領域を除いて、語彙もきわめて限定されています。

言葉を目盛りに喩えれば、目盛りの「間」に対する感受性が重要な役割を果たすからこそ、目盛り自体は限られた稠密さにとどまるわけです。そんな社会では、言葉の世界の「外」に言及不能な世界が拡がっていることを忘れると極めて危険なことになります。

だから定期的に訪れる祭儀の中で日常ありえない無礼講を実現し、男女・上下の役割を逆転し、イケニエ儀式で動物や人の死を目の当たりにするといった形で、言葉の限界への感受性・目盛りと目盛りの間への感受性を「更新」します。

祭儀は「意味」でなく「強度」を経験するチャンスです。ただ祭儀が主体的に選んだ「行為」でなく、決まり事として否応なしに訪れる「体験」であることは重要です。だから「意味ではなく強度に意味を認めて選ぶ」という逆説はありえませんが、

ところが、私たちが依拠する複雑な社会システムは「二重」問題をややこしくしました。第一に、システムが複雑になり、面識圏内の現実構成の自明さを頼れなくなると、言葉（目盛り）を頼る度合いが飛躍的に高まります。

システムの複雑化は目盛りの稠密化を加速しますが、そこからますます便益を引き出すようになった私たちは、そのうち目盛りの「間」を忘れる。目盛りの「間」を忘れてもらわない

と、目盛りに従って動く以外にない装置であるシステムはうまく回りません。

第二に、そうした社会でも一定のセットアップがあれば目盛りの「間」を体験できますが、セットアップ自体は個人の責任でなされる以外ありません。すると「意味でなく強度を」という意味を頼って努力しないと、問題の体験が訪れなくなりず。

原初的な社会では「訪れる」体験だったものが、意味に媒介された行為で「選り取る」体験になりました。個人の自由な選択（自己決定）が賞揚される近代社会は、「見素晴らしく見えて、実はある意味「進化の袋小路」だと言えるのかもしれない。」

## 「観念」と「実践」の差異

こうした社会システムでは、誰もが「意味と強度」の問題について、本質的な困難を抱えます。私も同じ困難から自由ではありません。私の言葉が冒頭のニーチェ的逆説にはまり込むのは、どのみち不可避です。ですから、ここから先は私の「独り言」になります。

前回、私の本を読んだり講義を聴いたりして「無意味さ」を言葉の世界で納得した人が、その後困難に陥ると言いました。たとえば『ダ・ヴィンチ』九八年八月号の「男の自殺」特集に登場した、私の熱心な読者で自殺したA君のケースです。

中学時代から「世界は無意味」を信条としていたA君は、日本海の辺鄙な田舎から上京する

と、路上ナンパやテレクラや風俗を通じて、多くの女性と匿名的に交流し、各女性の「カルテ」を記録していきました。これは十年前の私の姿そのものです。

たぶん「世界は無意味」という仮説を実証する「実験」なのです。親友の渡辺君によれば実験を開始した頃からA君は自殺願望を語るようになります。一体何が起こったのか。「仮説」段階と「実証」段階では、無意味の意味が違ってきたんでしょう。

私自身テレクラで五十人切りを達成したころから深い鬱に陥りました。男のテレクラマニアも大勢取材しましたが、彼らの多くも似た経験を持っています。かつて紹介した東大生売春嬢も、相手が三十人目を数える頃から深い鬱になったと言います。

自由な近代社会では、自由を放棄する自由、他人や共同体にひたすら同調する自由もありそうなのに、その実「他人と違うかけがえのない自分であれ」＝「個性的であれ」という要求に晒され、私たちは「自分探し」に四苦八苦しています。

ところがこの個性は虚偽意識です。会話でそいつの番になると何を話しているのか分からなくなるような過剰な個性は「分裂病的」と診断されますし、私たちは雑誌で「個性的恋愛」特集を読んで個性的であろうとする。個性は高々、範型の順列組合せにすぎません。

実際数十人・数百人相手に性愛コミュニケーションを重ねると、誘惑と受容のシグナル、性交技法、最中の声や仕草、相手を愛でる態度や言葉、身の上話、愚痴や言いわけ、社会への不

満など、すべてのコミュニケーションが順列組合せだと確証されます。

最初は浅い付き合いだからだと思ひ込もうとします。でも数を重ねると、浅く付き合ったなら浅く付き合ったりの型、深く付き合ったなら深く付き合ったりの型の順列組合せがあることが分かってくる。むしろ自分自身もその型から出られません。

かくして「かけがえのない個性」「人から見える世界は人それぞれ」という意識せざる幻想が失望に晒され、どんな人間に会ってもどんな話を聴いても「弛緩した既視感」しか見つからなくなる。村上春樹『アンダーグラウンド』のオウム被害者の聞き書きを読むように……。

### 底を打たずには「逆転」できない

私の場合、無意味さに納得した後、無意味な世界を生きるとはどういうことか、どうやって無意味な世界を生きられるのかが知りたくて、自分のリアリティの空洞を他人のリアリティを張り合わせて埋め合わせようと、テレクラにさらに深くはまりこみました。

でも埋め合わせられたと思ったのは束の間で、無意味を「観念」で納得した後の「実践」で「終わりなき日常」の平坦さは増大します。平坦さの向こうに何かあるかもと、さらにテレクラにはまり、平坦さがさらに増大し、さらにテレクラにはまる。

こうして自分と世界が希薄になる中、何とか強度（濃密さ）を維持しようとアップ系・刺

激系の性にのめり込みます。ロールプレイ、3P、SM……。慣れに抗するためにますます強い刺激が要求されますが、いずれは天井に突き当たる道です。

そんな状況が十年続いて桜井亜美と出会います。茶髪にカラコンの私は無表情なナンパ・サイボーグだったと彼女は言います。当初互いにワン・オブ・ゼムでしたが、遊びで互いの唾液を混ぜて試した簡易エイズ試薬で陽性反応が出たことが転機になります。

双方身に覚えがある行状を告白しつつ、どちらがエイズなのか分からないまま、社会から引きこもってセックスし続けた、最終結果が出るまでの二週間。それが終わると（結果は陰性）、不思議なことに「逆転」が生じ、失われた感情機能が回復していたんですね。

私的経験をもとに独り言を続けます。あくまで回顧的に、二つのことが問題になります。第一にテレクラ修行を通じた「どん底化」はどんな機能を果たしたのか？

第二に「どん底」状態からの「逆転」は一般に可能なのか？

第一の問題。ニーチェは、ソーシャル・スキルが皆無で、社会とのシンクロ率が極端に低い「どん底の人」だったからこそ、意味の世界をよじ登るのを放棄し、「逆転」して、梅の花の咲いた頭で、意味の「外」を直接に生きはじめました。

なまじつかなスキルがあった私は、「世界は無意味」と頭では納得しても、自分が取り替え可能で無個性なゴミだという事実を前提に生きられなかった。テレクラ修行を通じた「どん底

化」は、そんな私にとって必要な通過儀礼だったと思います。

第二の問題。意味の世界の「外」は、「生の歓喜」に満ちていると言えるのか。あくまで独り言ですが、私はそう思います。実際、生きる意欲を促す快感をもたらす遺伝的プログラムが、すべての動物に仕込まれています。

しかし、祭儀を失った近代社会システムは「外」の扱いについて前述した二重の不可能性を刻印されています。近代社会が、「訪れる」「モイを排除し」「向かう」べきモノを指示するシステムだからです。定義上、外は「訪れ」ても「向かえ」ません。

だからこの社会では「逆転」の可能性も方法も指示できません。「体験者の視点から」外は素晴らしいと言うのは中沢新一的ベテンです。体験のピフォア視点とアフター視点が乖離しているので、ピフォアからアフターを評価することは、論理的に無意味です。

### 生きるのと死ぬとの間

《日本もインドみたいなのもってデタラメな国になっちゃえばいいのにな／でもこーして1ドル88円で気楽に旅行できるのも：戦後日本人がコツコツつままない労働したおかげなんだよねー／私なんかなーんにも考えないでポーツとしていたいけどなー／私はたっぷりの時間と少々のはっぱがあれば簡単にどこまでも自分の精神を解放することができる／今まで自分でリラックス

スしていると信じていた状態は実はリラックスでも何でもなくて：／その奥にはそれとは比較にならないぐらい安らかで充足した境地がある》。

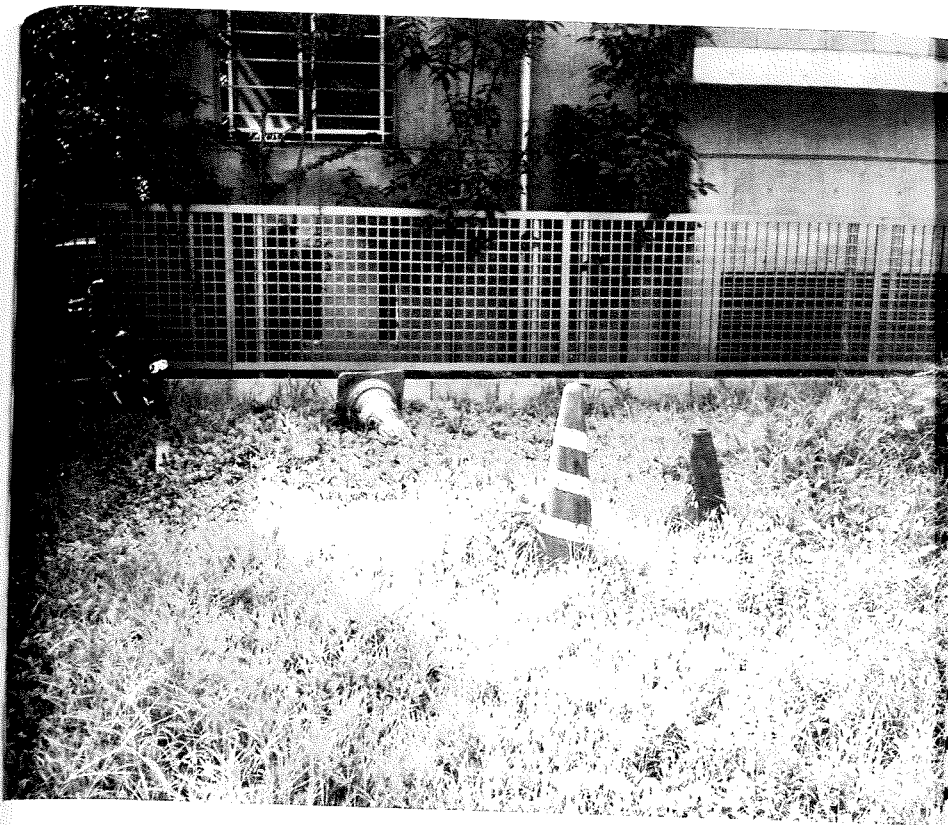
『ぢるぢる旅行記』でのねこぢる先生の御言葉です。実のところ、感覚を開いて（＝逆転して）生きることに、死を選ぶことの間には、敷居がないのかもしれない。ねこぢる先生の計報を聞いて私はそう思いました。そういえば生同様、死も遺伝的にプログラムされているのです。

「生を選ぶさしたる理由はない」が「死を選ぶさしたる理由もない」。だから、面倒くさいとか家族を苦しめたくなかったとか「ささいな理由」で「生きる動機」が得られる。ねこぢる先生は、そういうふうには生き続け、死なれたのではないのでしょうか。

独り言もいよいよラストです。意味を求める人はどうでもいいとして、意味から離脱を試みる人の苦しさは、システムが構造的に用意したものです。苦しむ人の多くはこの構造を論理的に把握せず、自殺したA君のように問題を「自分に」帰属しすぎる傾向があります。

問題を自分ではなく「世界に」帰属し、アッパー化・刺激化などで時間稼ぎをして「待て」ば、ひょんなことでシステムの破れ目から名状しがたい何か「訪れ」、逆転が可能だった「かもしれない」。でも「だから」生きるとはアフター視点からは言えないのは前述の通り。

同じ理由で、待っても訪れないかもしれない「から」死ぬという選択も、実は自明性を欠きます。あなた「が」苦しいから、あなた「が」死を選ぶという論理もまた破綻しているのです。



Q 意味から強度へ移行できない私はどうすればいいのか？

- 1 最近、合法・違法を問わずドラッグが話題ですが、どこがいいんですか。僕もやってみたいんですが、どうなるんでしょう。(21歳・男・大学生・SN)
- 2 宮台さんの文章を読んで、宮台さんはもともと高いポテンシャルがあるから「意味から強度へ」移行できたんじゃないかと思いました。ポテンシャルの低い僕は、待っても強度は訪れないんじゃないでしょうか。(24歳・男・会社員・AK)

A

前回の相談では、「意味を求めても得られない」ので、意味を捨てて強度（意味に回収できない濃密さ）を獲得しようとしたら、今度は「強度を求めても得られない」という以前よりずっと大きな苦しみが襲うという問題についてお答えしました。

第一に、意味の外側に強度を「求めても得られない」という困難は、人々を意味へと動機づけるために近代の社会システムが準備したものだから、苦しい理由が自分にあると考えるのは誤りだ、と言いました。

第二に、近代社会では「意味でなく強度に意味を認めて」追求するという逆説を引き受けるほかないが、「求める」という意味的態度が強すぎると意味的態度につきものの無意味感や期待外れに敗北させられるから、時間稼ぎをして「訪れる」のを待つ態度が必要だと言いました。

第三に、確かにいくら待っても「訪れ」ないかもしれない。でも「苦しいのは自分」だから「自分が死を選ぶ」という論理は自明じゃないとも言いました。この部分は分かりにくかったようで読者の疑問が集中しました。現象学という哲学を用いて答えることから始めてみます。

「私は苦しい」と思うのは誰か

世界の中に私がいる。この私を「経験的主観」と言います。では「世界の中に私がいる」と

思うのは誰か。私？ 普通はそう答える。このとき「世界の中に私がいる」という構図の全体を「世界の中の私」という部分に帰属する操作が行われています。

世界の全体を、世界の部分である身体像に対応させる操作は、自明だろうか。確かに身体像の内側に視界の座（パースペクティブ）がある。その視界の座から「世界の中の私」が認識されているのは確かだとしても、論理的にはその座が私（経験的主観）である必然性はない。

「認識しているのは（世界の中の）私だ」と思っているのが（世界の中の）私である必然性はない。ここから経験的主観と区別される「超越論的主観」（世界の外）の観念が生まれます（後にこれは再び「世界の中」に回収されて「間主観性と呼ばれます」）。

システム理論も同様に考えます。「私は苦しい」と思うのは誰か。私じゃないのではないか。私としての私ではなく、システムとしての私が苦しんでいるのではないか。とすれば「私は苦しい」から死ぬしかないと思いは、周到な被作為なのではないか……。

これは、子供が問う「なぜ僕は僕であって君じゃないのか」という疑問とも結びついた根本的問題です。視界の座はいつも「ここ」でしかなく、絶対に入れ替え不可能なのに、「ここ」は、経験された私と同一ではない。私が経験する私は、必ずしも私でなくてもよいはず……。

このまま話し続けても話が難しいままなので、実践的な場面に移りましょう。実は私も前回紹介した「どん底」状態のときに、ようやくこうした経験帰属の問題の実践的意味が分かった

のです。しかもこれは、今回の二つの質問にある強度の「訪れ方」の問題と密接に関係します。  
結論から言えば、名状しがたい強度が「訪れる」のは、①「これは私だ」と思いこむ主体が私ではなく他者であること、ならびに、②「私だ」とされた客体は実は錯覚で、私は「よそよそしい他者」でしかないこと、を経験できたときなのです。

### 私の中の私でない私に出会う

九八年七月二十五日に朝日新聞厚生文化事業団主催の「薬物からの回復をめぐる」というシンポジウムで、薬物自助グループ「ダルク」の近藤恒夫さんらと話しましたが、そこで元人氣モデルの男性日さんが面白い体験発表をしました。

人気モデルだった彼は、同調圧力に負けて薬物を始めますが、「まわりからチャホヤされる自分」と「本当の自分」のギャップに苦しんでいたこともあって、薬物に頼って「本当の自分」の中へと下降していきます。ところがそこで意外なものに出会う。

印象的エピソードをいろいろ話してくれましたが、たとえば「カップヌードルの夢」。三分間待つ間に、スープが海に、ヌードルが泡立つ波に見えてきて、気が付くとカップの淵に座って、顔見知りの連中とエビ釣り競争をしています。

一日頑張つてとうとう勝つと、ムームーを来た女の子が「おめでとうございます！ ハワイ

旅行ご招待です！」とレイをかけてくれ、豪華客船でハワイへと出航。一週間サーフィンをやりに続けて……気がつくとカップヌードルの前で座っている（笑）。

そんなふうに分の中にある不思議なものに驚き、興奮して絵に描きとめます。ところが、やがてハレとケが逆転。トリップの非日常が日常と化して喜びが消え、シラフの日常が苦痛に満ちた非日常と化します。薬物は歓喜よりも苦痛の源泉に変わってしまったのです。

彼は二つのことを言いました。①薬物の怖さを知らないと人生がメチャクチャになるのは自分の例から明らかだ。しかし、②薬物が（初期に）与えた歓喜を知らないで生きるのはもったいない気がする。実際自分は少しも後悔していない、と。

薬物の与える体験の素晴らしさを知ったうえで、なおかつ薬物によらない代替的な人生を送る具体的な知恵を学ばなければ、本当の解決にはならない。私は彼のメッセージを、威嚇教育（人間やめますか）を批判する立場から、そう受け取りました。

しかし問題はそこから先です。薬物を頼らず、しかも薬物で得られる貴重な何かを失わないような、単にドラッグレス・ハイ（ドーパミン系体内物質の分泌）にとどまらない方法が具体的に存在するのか。そしてその方法は万人に開かれているのかどうか。

## 薬物なしで私の牢獄を脱する

私の結論は両義的です。確かにそういう具体的方法は複数あると言えるし、多くの人がそのどれかにアクセスできるとは思います。しかしそれが有効な方法であるには、方法を用いるに「先だち」、用いる側が一定の変化を遂げていなければならぬから、お手軽ではありません。ドラッグレス・ハイというだけなら、僕自身もしばしば経験するスイミング・ハイやゲームに夢中になる興奮などがあります。スリルや怒りもドーパミン系物質を分泌させます。でもHさんが体験発表した「薬物で得られる歓喜」はそれを遙かに超えるものであるのが重要です。一口で言えば「私の中にある、私ではない名状しがたきものの豊かさ」に圧倒される経験です。これから述べる私自身の薬物代替的な方法も、単なるスリルや興奮ではなくて、「日常的には封鎖された感覚」を解放するという共通する特徴があります。

たとえば、私にとっては一部の写真集です。昨年（九七年）暮れに出た渡辺克巳『新宿（1956-197）』（新潮社）ではまる一日トリップしました。かつて都立中央図書館に所蔵された荒木経惟の数々の写真集に、開館から閉館までまる三日間浸り切ったこともあります。記憶の一部が刺激され、それがきっかけとなって感覚のロックが連鎖的に解除されていき、しばらくすると怒濤のような記憶の渦が、走馬燈のように私を襲い、めまいのような感覚で

まったく時間を忘れてしまいます。

もう一つはダンス。ジャングル系とかゴアトランス系とかいろいろありますが、特にハッピー系で踊り明かすと「メッセージなき自己改造セミナー」みたいな効果が得られます。オーブ・マインドになり、感覚が拡張され、感動しやすい体質に変化します。

最後にセックス。私は、自分の行為に興奮するより、相手の女性に引き起こされている感覚を自分に再現して興奮するタイプで、小学生の頃からアニメや映画のヒロインがイジメられたり拷問されたりするシーンで自分が女の子になって興奮しました。

だから女性が興奮するなら言葉責め、レイプごっこ、複数プレイ、露出プレイ何でもOK。女が泡を噴けば私も噴く（笑）。風俗嬢によれば業界で「マゾ的サド」と言うそうです。しかし写真集にしるダンスにしるセックスにしる、これで感覚が解放されるには条件があります。

## 感覚解放の最終障壁とは？

「日常的には封鎖された感覚」と言いましたが、近代の社会システムは、個人の自己防衛という迂回路を通して、感覚封鎖を実現しています。すなわち感覚を解放しようとすると自我の防衛機制に引っかかるように仕組まれているわけです。分かりやすいのがセックスです。

セックスは「私が私でない」ことを経験できるチャンスだと三七頁で述べました。それを繰

り返しませんが、ここではそれに加え、セックスは自己防衛の障壁に気づかせてくれ、ゆえにそれを取り扱うチャンスを与えてくれることを強調しておきましょう。

私が初めて複数プレイをしたときショックだったのは、自分よりも逸物が大きい男の前にすると自分が萎縮する事実でした(笑)。女は大きさを求めていないと本に書いてあるし、頭で分かってはいましたが「普段出さないアエギ声を出しやがって」などと(笑)クラクラくる。

性感マッサージなどで肛門に指を入れられるのもそうです。男も受動的だっていいと、頭で分かってても、実際恥も外聞もなく声を出して身悶えする自分が許せません。セックスは、言葉で分かったつもり自分など、本当に当てにならないことを思い知らせてくれます。

ですが「安全な自分流」の放棄に成功して問題を克服(笑)した暁には、自己防衛ラインは以前よりも後退し、その分利用可能なリソースが増大します。セックスは、語学と同様できることとできないことがどの時点でも明瞭に分かるから、防衛機制克服の良き指針になります。

しかし二つだけ問題がある。①「自分流」放棄にはバンジージャンプみたいに勇気が必要で、それが薬物にはない困難です。②「自分流」放棄は、とりあえずは「非日常」つまりドーパミン系の刺激しか意味しません。確かに強度を与えるけれど、薬物同様、いずれ「慣れ」ます。

私の場合、前に述べた「エイズ試薬騒動」がきっかけで日常に対する構えが変わり、「非日常」へは開かれているが日常へは閉ざされた「ナンパ・サイボーグを脱することができた。しか

し単なるラッキーでなく、「求めて」いたが故にチャンスを見逃さなかったのだと思います。

結局、①「自己防衛ラインの破壊」の後に、②「感覚の日常ベースの書き換え」が必要です。①がないと②はありません。私の周囲の人間たちを見る限り、①を経ているれば、「求めて」「待つ」ことで、大いなる可能性で②は「訪れ」ます。そこで回答です。

男子学生SNさん。麻薬の最大の魅力は、自分の中にある名状しがたきものの豊かさに圧倒される経験です。しかし慣れで、途中から「クスリ(非日常)が普通、シラフ(日常)が苦痛」と逆転し、そのときは体もポロポロ。別のやり方を考えましょう。

男性会社員AKさん。逆です。強度獲得に成功したからポテンシャルが高いように見える。

私も、周囲の成功した連中も、①一旦「壊れ」て自己防衛ラインを後退させた後、②「求め」ながら「待つ」ことで「訪れ」の徴しを見逃さなかった。結論。「壊れ」そして「待つ」!

A

六〇頁の相談で、援助交際する女子高生を描いた映画『ラブ&ポップ』と『バウンスK。GALS』に共通して、暴力に出合っただけで改心する設定があるけれども、誤りだと述べました。むしろ暴力さえ「壁」にならない気色悪さだけが辛うじて壁になるかどうかでしょう。

九八年八月、一〇〇頁の相談で紹介した自殺したA君の、中高時代の友人四人に集まってもらい、あれこれ話しましたが、そこでは「自分たちが生き延びているのは、A君ほど恵まれてなく、『壁』と格闘するからではないか」という話で、えらく盛り上がりました。

A君は、経済力にも、容姿にも、社交能力にも、頭脳にも、理解ある親にも恵まれていた。自分たちは、こうしたもののどれかに<sup>つま</sup>差<sup>ち</sup>き、悪戦苦闘するからこそ「強度を求めても得られない」という苦痛に、ナマで向き合わないで済んでいるんじゃないかと言うんですね。

### なぜ「性」と暴力が噴出するのか

九〇年代に入って話題になった若い人たちの「逸脱行動」は「性」の領域と「暴力」の領域に突出しています。なぜなのでしょう。性も暴力も共通して、強度<sup>強度</sup>意味に回収できない濃密さ<sup>強度</sup>のリソースになるということが、重要なヒントになります。

性は性衝動という本能と結びついているし、暴力も暴力恐怖という本能と結びついています。

す。だから性も暴力も、意味のあるなしとは無関係に、強度の源泉になります。だからこその両者は、意味によって成り立つ近代の社会システムにとっては「危険」なのです。

だから性も暴力も、社会にとつて無害であるように馴致されてきました。たとえば性は「家族のもの」と考えられ、夫婦で行う以外のセックスは逸脱だと考えられました。売春は、逸脱として意味づけられることで存在を許され、そのことでむしろ正しいセックスを補完しました。暴力も同じです。親族や部族仲間がやられたらやり返す<sup>けし</sup>血<sup>け</sup>讐<sup>し</sup>的な暴力は、どんな伝統社会でも正当どころか、義務でした。ところが一つの司法権力に覆われる近代の一国内では、「自力

でやり返す」かわりに「国を呼び出す」ようになります（国際間では血讐システムのまま）。

もちろんそれで暴力が消えるわけではありません。暴力が国家に譲渡され、「国家が独占する正当な暴力」と「そうでない不当な暴力」が分けられたのです。ちょうど「家族が独占する正当な性」と「そうでない不当な性」が区別されたのと、同じことですね。

子供たちを「正しい暴力」（暴力の禁欲と国家による独占）や「正しい性」（性の禁欲と家族による独占）に向けて動機づけることが「国民化」の要諦です。学校や家族が、つまり教員や親が、そうした動機づけを伝達する国民化のエージェント（請負人）になり続けてきました。

ところが成熟社会を迎えると、子供たちや若い人たちの「意味ある性」「意味ある暴力」に向けて動機づけてきた力が弱くなってきます。その理由は、日本だったら八〇年代を通じて、

若い人たちが学校・家・地域から離脱する「第四空間化」を遂げることになったからです。

成熟社会では

①「何が幸せかは人それぞれ」という具合に価値が不透明化すると同時に、  
②「未来のために現在を、社会のために自分を犠牲にする」という振る舞いの意味を支える未  
来や社会が不透明化し、代わりに「今ここ」で強度を享受することが重要になってきます。

にもかかわらずこうした変化に適応できない「旧空間」（学校・家……）が「いい学校・いい  
会社・いい人生」みたいな意味や物語に固執するので、子供たちや若い人たちの多くは、「第  
四空間」（ストリート・匿名メディア・仮想現実……）へと押し出されることになりました。

正しさを意味づけする家や学校というエージェントがない「第四空間」では、性も暴力  
も、家や学校で教えられているのとはまったく違った様相を帯びて現れざるをえません。つま  
り性や暴力が本来持っている「強度」（意味に回収できない濃密さ）が、前面に出てくるのです。

その結果、このコーナーでも強調してきた「意味から強度へ」というそれ自体成熟社会では  
不可避の流れにあつて、暴力や性によってテンションを獲得したり、それを通じて肯定感を体  
感しようという動きが急上昇することになります。ところが、ここに困難が生じるのです。

つば、冒頭に述べた話に関係しますが、第四空間化した性や暴力には「壁」（タブー）が  
なく、そのこと自体が実は「強度」の享受を難しくします。もう一つ、こうした第四空間での  
強度追求は、「正しい性」や「正しい暴力」とは違って、必ずしも「共生」と両立しません。

### 「壁の在・不在」が持つ機能

壁の存在・不在は、どういう意味を持つのでしょうか。まず第一に、A君の友人たちが言う  
ように、壁に突き当たり、乗り越えようとして押し戻されるという動きを通じて、つまり「よ  
じ登る」とか「乗り越える」という行為自体によって、テンションや濃密さが与えられます。

第二に、もっと重要なことですが、世界の中のどこに自分が位置していて、どういう方向を  
向いているのかというパースペクティブを獲得することが、まったく壁のない、スープの中に  
浮かび漂うような状態ではほとんど不可能になるということがあります。

私がこのことを強く思うようになったのは、子供との付き合いを通じてです。パートナーの  
連れ子（女兒）と出会ったのは三年前ですが、当初は実の父親と別れたばかりということも  
あつて分離不安の状態だったので、癒してあげようと思つて、ひたすら甘くしていました。

でも今から思うと、甘くしていた頃は、関係がうまく形をなしていませんでした。ここ一年  
ほどは、慣れ親しみが前提になつて厳しく叱れるようになりましたが、すると突然彼女が私の  
言うことを気にしたり、私の反応に一喜一憂するようになり、感受性の幅が出てきたのです。

甘くしていたときは私が何者なのか分からなかったのですが、厳しくするようになって  
から、彼女は私との間の「現実の関係」と「あるべき関係」の差異に敏感になり、何かをしよ

うと動機づけられるようになりました。つまり、壁を通じて世界を構造化したわけですね。

これはフロイトが「父性」と述べたものに関係しています。母子一体の状態、子供から言えば、自他未分すなわち世界と自分が癒合した感覚（全能感）に、楔を打ち込んで、自己イメージと世界イメージに、輪郭を与え、構造化する役割のことですね。

これはしかし、一般に誤解されがちなのは違って、父親が道徳を示し、子供がそれを学んで道徳的になることを推奨するものではありません。むしろ問題になっているのは、自分と世界の境界線を引き、自分と世界との距離を測定可能にする「ガイドライン」の機能です。

ガイドライン、つまりガイドレールに沿って道を進んでも構わないし、逸れて行っても構わない。どちらに進むにしても、ガイドレールを一つのモノサシにして、自分がどこにいて、どちらに進もうとしているのかが分かる。つまりポジショニングができるんですね。

ポジショニングを可能にするメッセージが世間的道徳である場合もあれば、宗教的倫理や個人倫理である場合もある。壁となる人間（別に父親じゃなくてもいい）は、共有された道徳や倫理の伝え手であっても（昔）、個人的な思い込みを生きる人であっても（今）、いいのです。

いずれにしてもそこで、メッセージを受け入れる受け入れないという選択が可能になります。こちらに行けば世間への順応、あちらに行けばアウトロー。こっちは親孝行、あつちは親不孝。どちらを選ぶにしても選択自体が人を社会に組み込み、脱社会化を阻止することになる。

この社会はいいと思うのも（社会性）、気に入らなくて別の社会がいいと思うのも（反社会性）、広い意味で社会的です。なぜなら肯定的にせよ否定的にせよ、社会をモノサシにして何かを選んだ時点で、社会に関わるコミュニケーションに、既に乗り出しているからです。

### 共生と両立する父性原理とは

私たちの社会で「脱社会的」な存在、すなわち社会の向こう側に突き抜け、社会と無関連になつてしまった存在——酒鬼薔薇聖斗のような——が出てくるのは、一つは、別の場所でも繰り返して述べてきたように、成熟社会における「承認の供給不足」が背景です。

たとえば、もはや現実が約束されなくなった物語（いい学校・いい会社・いい人生といった）を押しつけることで、子供は承認から見放されます。一部は、承認を当てにして右往左往するA・Cになります。別の一部は承認から離脱コミュニケーションの外を生きはじめます。

ところがもう一つ、「壁がない」ということも、私の考えでは、脱社会化の契機として見逃せません。社会の向こう側へと押し出すようなどんな不承認もないように見えるのに、社会の中にいながらモノサシがないので、「中にいる」ということをうまく実感できないからです。

皮膚の感覚がいい例ですが、同じものにずっと触れていると、じきに触っていない・触られて





Q 共生原理に反せず強度を持つ「ダウンナー系まったり」とは？

1 大学の先輩のHさんは、いつもポーツとしていてマイペースなんだけど、なぜか友人や後輩たちがまわりに集まってくるような人です。何より、彼自身が毎日を楽しく過ごしているように見えるところが不思議です。私も強く惹かれています。ですが、いったい彼の魅力って何なのでしょう？（20歳・女・学生・S-）

2 学校の教師をしています。最近、『GTO』などの異色熱血教師モノがはやっていますが、実際あんなふうになれるもんじゃない。でも、できればカッコイイ教師でありたい。宮台さんが前回の相談で書かれていた、「共生条件に抵触しない「父性原理」とは何ですか？ それは、教育現場でも応用のきくものなのでしょう？（29歳・男・公務員・HM）

A

壁があれば、①壁に突き当たったり格闘することでテンションや濃密さが与えられ、強度を求めても得られないという希薄さに苦しまずに済むし、②壁がモノサシになって、こっちに行けば順応、あっちに行けば抵抗という具合に、社会の中に自分を位置づけられます。

社会を生きる濃密さを与え、同時に社会のどこに位置するのかを実感させる壁の存在を、フロイトは父性と呼び、人間が社会的存在になるための重要な契機だと考えました。これに異論がないとしても、父性を、現実の強い父や国家と同一視するのは問題です。

人間が社会的存在に育ち上がることは、人が共に生きる（共生原理）ためには不可欠です。父性を要求するのは共生原理なのです。だから父性が「強い国家への同一化」などと等置されてしまつては、共生原理に反して、元も子もなくなりません。

とすれば、「成熟社会における共生原理」と両立するような父性、言い換えれば、意味追求ではなく、「共生原理に反しない強度追求を促す」ような父性とは、具体的にどのようなものなのか。引き続いて、じっくり考えてみたいと思います。

### 少しもダルクくない男

前にも言及した、私の愛読者で、自殺した大学生A君には、渡辺君という親友がいました。

『ダ・ヴィンチ』九八年八月号「男の自殺」特集で紹介しましたが、「そこそこ楽しいが、意味はない」と言うA君に、「意味はないが、そこそこ楽しい」と返答した渡辺君のことです。

A君は少女のような外見ですが、渡辺君は金色の髪にピアスのストリート少年。二人とも見栄えも頭もいい男の子です。だから二人でナンパすれば成功しまくりだったようです。そんな二人の決定的違いが明らかになるのが、大学進学直前の時期です。

A君が「東京に『実験』しに行く。確かめたことがある」と言うと、渡辺君は「地元でできることが東京でできるとは思わん」と返し、ペンキ屋になります。そんな彼にA君は「なぜ伸びきったゴムのようで生きられるんだ？」と尋ねたといっています。

九八年八月、渡辺君も含めて、A君の高校時代の友達四人（男は渡辺君とI君、女はJさんとKさん）に集まってもらっていろいろ話を聞きました。渡辺君以外は一流大学の子たちですが、この仲間たちの間では、渡辺君が圧倒的なインシアチブをとり、尊敬を集めています。

Jさんは「まだ得られないが、どこかに意味ある人生がある」と思っています。Kさんは「意味ある人生はないだろうが、忙しくて悩んでいる暇がない」と言います。I君は「いちばんうまく生きていると思ったA君の自殺で衝撃を受け、以来自殺願望がある」と言います。

各人各様の生き方ですが、渡辺君以外は共通して「毎日がダルクイ。気をつけないとダルクさのまれてしまう」と言います。そんな中でネイティブ・アメリカンの酋長みたいな風貌をした

渡辺君だけが「全然ダルくない。毎日が楽しい」と、笑みをたたえつつ言うのです。

A君の葬式をきっかけに渡辺君と出会った仲間たちは、渡辺君とのコミュニケーションをきっかけに「先延ばし」や「多忙に紛らせる」といった自分の生き方を再考するようになりま

す。毎日が少しもダルくない渡辺君は、それほど魅力的な存在だったというわけです。

三種類ある「まったり」

意味(物語)からの離脱を「第一解脱」と呼び、強度(濃密さ)の獲得を「第二解脱」と呼ぶならば、第一解脱と第二解脱の間には大きな距離があります。若い人の多くは、A君同様、意味からの離脱に成功しても、強度を求めても得られない困難に苦しみます。

昨年(九七年)、北海道から九州まで、ダンサー、スケーター、クラブ、ドリフト族、援交少女など若い人たちがテレビの仕事で大勢取材しましたが、さしあたって第二解脱に成功したまうに見える子たちをよく見ると、少なくとも三種類の生き方があることが分かりました。

一は「アップパー系まったり」。強い刺激を求め、暴力的非日常や性的非日常の方向に進む連中です。このタイプは、慣れに抗するために、刺激を昂進させるから、犯罪的・反社会的になりやすいという欠点があります。かつての私は、ズバリこれでした。

もう一つは「ダウンナー系まったり」。ドラマチックなイベントなどなくとも、小さなことを

楽しめる「感覚の開かれた」連中で、若い世代にしか見つからないタイプです。渡辺君はこれ。ダンサー、スケーターなどの達人も、すべてこれです。

三つ目は「エモーション系まったり」。たとえば「愛」のように「嘘だと分かっているが、あえてするゲーム」にコミットして、現実を虚構化・日常を演劇化する。ダウンナーになりきれず、若い頃にアップパーをやった「頭打ち」になった年長者に多いタイプです。今の私はこれです。

この中で、いちばんグレードが高いのが「ダウンナー系まったり」です。長続きしない「アップパー系」は論外として、感情に訴えるさまざまなコミュニケーション・デバイスが必要な「エモーション系」よりもエコノミカル(省エネ的)で、環境に依存する度合いが低いからです。意味からの離脱すなわち「第一解脱」に成功した若い人の多くは、既に「ダウンナー系」V「エモーション系」V「アップパー系」という階層関係を、強烈に意識しています。渡辺君が尊敬されているのは、この階層関係の頂点に位置するからだと言えましょう。

### 世界と仲の良い「脱社会」

「どうしてダルくないんだ」と渡辺君に尋ねたことがあります。三秒ほど考えて彼は答えました。《宮台さんの言えば、脱社会だから。《脱》が徹底しているからですよ》。「脱社会」という言葉をネガティブに使っていた私は、大いに驚きました。

渡辺君は言います。自分は幼少期から、脱達成・脱上昇・脱支配・脱コントロール・脱意味だったので、周囲の人たちのコミュニケーションとうまくシンクロできなかった。でも苦しかったり劣等感を持ったことはない。その意味で「脱社会」なのだ。

私の本も多数読んでいる渡辺君は、私が、「コミュニケーションの外側を生きる、他者の承認を必要としない存在」を「脱社会的」と呼ぶのを受けて、このように言ったのです。すると私のネガティブな語法と、渡辺君のポジティブな語法は、どこが違うのでしょうか。

私が言及してきた脱社会的存在（酒鬼薔薇聖斗など）は「脱社会であることで、世界と敵対して」いて、ネガティブで非日常的な感じがします。他方、渡辺君は「脱社会であることで、世界と仲良くなつて」いて、ポジティブで日常的な感じがします。

渡辺君は小さい時から、周囲の人たちの意味追求的な生き方やコミュニケーションから、無関連に生きてきたと言います。そういう人たちに承認してもらえないことが、初めから全然苦痛にならなかった。この辺が「普通の人」と違うところです。

普通の人は、意味追求的な周囲の人たちに承認してほしくて、自分も意味追求的に生き始めます。しかし成熟社会では見返りの獲得が困難なので承認の供給不足が生じ、アナルト・チルドレン A・Cや引きこもりになったり、承認から離脱した「脱社会的存在」になったりするわけです。

意味を志向する周囲のコミュニケーションに、幼少期からまったくシンクロできない場合

——その意味で「脱社会」であれば——、普通の人だったら酒鬼薔薇聖斗みたいに現実世界から離脱し、世界と敵対関係に入りがちです。ところが渡辺君は違うのです。

渡辺君は幼少期から、「現実世界から意味を取り除いた余白の部分」を存分に享受できたと言います。そのため意味追求的な他者から——たとえば学校教員から——承認されなくても、脱意味的な余白世界からは承認されていたというこらしいのです。

論理的には、周囲が渡辺君のような人たちばかりという環境で育てば、本人が脱意味的であっても、意味追求的他者とのコミュニケーションによる「意味的な不承認」を招かず、むしろ脱意味的他者からの「脱意味的な承認」を獲得できるはずで

ただし渡辺君に尋ねても、家庭環境は普通だと言うだけ。特に親が好きだということもないし、影響を受けたこともないと言います。いずれにせよ小学生のときには既に十分「脱意味的」だったようです。渡辺君は「天然系」なのかもしれません。

### 〈ポジティブ説〉という壁

『キューティ・コミック』のような女の子メディアは、「自分探し」の対象となる一貫した自分を放棄し、モザイク状の自我となって「今ここ」とシンクロするよう推奨します。自分探しの反対の「自分消し」。いわば〈消〉を志向するわけです。

他方、男の子メディアは、十年前の三浦建太郎『ベルセルク』の連載開始ごろから「絶対悪」や「理解不能暴力」を頻繁に描きます。キャラの多くは、意味の井戸を深く掘るうち、底を突き抜けてしまったとでも言うような「脱社会的存在」。いわば〈脱〉を志向しています。

ただしそれは、世界を否定する非日常的な〈ネガティブ脱〉です。渡辺君みたいな存在は、自分消し的な〈消〉とも、世界否定的な〈ネガティブ脱〉とも違う。一貫した自分を保ちつつ世界と肯定的に関わり、しかし意味からは徹底して離脱した〈ポジティブ脱〉です。

実は、まったり三類型のうち、刺激追求型「アッパー系まったり」や虚実追求型「エモーション系まったり」が、素の自分を忘却する〈消〉であるとするれば、エコノミーな「ダウン系まったり」は〈ポジティブ脱〉にあたります。でもサブカルチャーにあまり登場しません。回答です。女子学生SIさん。人々が周囲に集まり、あなたも惹かれる先輩は「ダウン系まったり」です。これは「意味からの離脱」まったり」の中でも最もステージの高い〈ポジティブ脱〉で、皆にもそのことが直感的に理解されているから尊敬の対象になるのです。

公務員男性HMさん。いいところを突いています。「意味もなくポジティブ」な異色熱血キャラの登場は、サブカルチャーにいよいよ〈ポジティブ脱〉が登場する兆しかもしれない。ただ過渡期だからでしょうか、今のところ非日常的なアッパー系の設定に傾きすぎる嫌いがありません。

意味追求ではなく、「共生原理に反しない強度追求を促す」ような成熟社会にふさわしい父性があるとすれば、それは〈ポジティブ脱〉的存在でしょう。それによって若い人たちは、自分の位置を評価するモノサシを与えられ、試行錯誤に向けて動機づけられます。

ストリートの若い人たちには、現にそういう動きが分厚く出現しています。ただしときには自殺したA君のように、〈ポジティブ脱〉的存在に打ちのめされる者も出てくる。過渡期だからです。

時間がたてば、〈ポジティブ脱〉的存在をモノサシにして、自力で前に進める若い人がもつと増えるはず。〈ポジティブ脱〉には渡辺君みたいな「天然」もいれば、鶴見済君のように艱難辛苦の試行錯誤を経た後天的存在もいるのだから。それが救いです。



Q 「あえて」漁師を選ぶ人々に、「あえて」注目する理由とは？

NHK教育テレビで放映された宮台さんが出るドキュメンタリー「黒潮の浜の大綱引き」を見ました。宮台さんを冷たい自己決定主義者だと思っていたら、共同体への帰帰を主張していたみたいで、混乱しました。どう思いますか。(26歳・男・会社員・AN)

前回、ドラマチックなイベントがなくても小さいことを楽しめる「感覚の開かれた」生き方を「ダウナー系まつたり」と呼び、昨今では、記事の中で紹介した渡辺君のようなストリート系の若い連中にしか見られない、珍しいものだと言いました。

しかし、スケーター族、ダンサー族、ドリフト族、援交族などの各種トライブ（部族）を取材しているうちに、「昨今」では珍しくても、「ひと昔前」すなわち近代化・都市化する以前なら少しも珍しくないんじゃないかと思ひ、田舎の人たちを取材してみたくなりました。

九八年十月二十九日に放映されたNHK教育テレビ『E.T.V特集・シリーズ海を行く』第四回「黒潮の浜の大綱引き」宮崎・油津」の番組制作に関わり、九月から十月にかけて小さな漁港・油津に何度か取材に出掛けたのは、実はそういう経緯があります。

番組では、レポーター、台本書き、ナレーション入れに関わりました。多忙で死にそうになっっているハズの「ストリート・フィールドワーカー宮台」が何をやっているのだと各所で疑問視されましたが、私が立てていた複数の仮説が実証される貴重な仕事でした。

### 漁師町ドキュメンタリーの概略

黒潮がすぐ近くを流れ、昔から漁業が盛んな町・日南市油津。マグロ漁の基地として知ら

れ、かつては水揚げが日本一でした。漁師数は四分の一に減りましたが、今でも大型船でマグロを追う遠洋の漁師と、小型船で日帰りの漁に出かける漁師がいます。

マグロ漁師は盆と正月しか港に戻りませんが、高く売れるマグロを追って油津の漁師八十人が海の旅を続けています。他方、沿岸で操業する小型船漁師は四十人。彼らは、大きな儲けよりも地元での暮らしを選んだ人たちです。

油津には江戸時代から伝わる漁師たちの祭りがあります。十五夜の満月の夜に大漁を祈願して綱引きをします。「エイサー」とかけ声をかける綱引き祭りは、沖縄（エイサー祭り）から九州四国にかけて、もともとは広く分布していたものです。

漁師たちが長く伝えてきたこの祭りは、昭和三十七年に一旦途絶えます。当時、船が大型化して、近海で漁をしていた人たちがマグロを追って遠洋に出掛けるようになり、何カ月も港に帰ってこなくなったからです。祭りは二十年も途絶えていました。

祭り復活の音頭をとったのは町の商店主たちです。彼らは沿岸の漁師たちに、もう一度祭りをやろうと提案しました。復活した祭りでは、漁師と町の人と一緒に準備をします。祭りの半月前からワラを整え、束にし、直径三十センチの綱を、六十メートルも編みます。

復活した祭りは年に一度、町の人と漁師とが一緒に共同作業を行う場となりました。祭りの復活と言っても、観光が目的ではありません。皆が力を合わせたり、同じ時間を過ごす大切さ

を見直す「心の町興し」です。

沿岸の漁師がつくる小型船組合の組合長・広若忠一さんは、東京でサラリーマンをしていました。やはり小型船で沿岸漁をしていた父親が体を壊したので、呼び戻されて漁師になりました。油津の漁師にはこういう「出戻り組」が珍しくありません。

午前三時、沿岸の漁は夜明け前に船を出します。漁が見たくて広若さんに連れて行ってもらいました。大雨が降り、雷鳴が轟く中の出港です。すぐ黒潮にぶつかりますが、潮目に魚がいるので、水の色が変化するところを狙って四千米ートルにもなる延縄はえなわを繰り出します。

とはいえ、都会育ちの私には水の色は識別できません。波に揉まれて大きく傾く小型船に支えなしで立ち、三十分間縄を流して二時間かけて引き上げる。広若さんの船のまわりを体重百キロを超えるサメがぐるぐる回っています。上げ縄の際に獲物を喰いちぎろうというのです。

風向き、潮の流れ、魚の動きを見ながらの作業は、昼過ぎまで続きます。判断の良し悪しは水揚げ量という結果になってすぐ表れます。データの見えると沿岸漁の先行きは明るくないのに、漁師の表情に暗さは窺えません。どうも仕事の中身に理由があるようです。

一つはその日のうちに見返りがあるという仕事の手応え。もう一つは絶えず肉体を使って生存本能を刺激されていること。《誰にも頭を下げなくていい。でも良くも悪しくも人のせいにはできない。そこがいいんだ》と広若さんは言います。都会の仕事とは対照的です。

油津には漁師になりたい若者が行く学校、県立高等水産研修所があります。生徒は七人。彼らと話したくて寮を訪ねました。漁師の父親を彼ら息子たちはカッコイイと表現します。彼らは父親から、肉体の頑強さや、不屈の根性を実感します。都会ではありえないことです。

油津で出会った小型船の漁師、そして小さな祭り、確かに「所詮」は小型船漁、「所詮」は小さな祭りです。でもそれを「あえて」選ぶことで、人々は「日々の手応え」を手にし、「共有された時間」を回復します。

今までこうしたものは、「経済の成長」や「豊かな未来」を口実に、「所詮」の論理で切り捨てられてきました。けれども私たちはこれから長い停滞の時代に入ります。「未来の豊かさ」と引き換えに「所詮」の論理で失ってきたものを、今「あえて」選び直す。

そうやって「毎日の手応え」と「共有された時間」を取り戻す。私は彼らの中に、「ここ」を濃密に生きるための工夫を、すなわち「終わりなき日常を生きる知恵」を見出します。——というのがコミュニティアン・宮崎哲弥をして落涙せしめたという番組の骨子です。

### 自然共同体でなく選択共同体へ

他人の権利を侵害しない限り（共生条件を侵害しない限り）愚行や自傷を含めて何をするのも自由だとするリベラリズム（自由主義）を放棄して、私がコミュニティアニズム（共同体主

義)に転向したのではないかとの指摘を、多くの方からいただきました。まったく違います。「リベラリスト」とは共生条件を侵害しない範囲でどんな尊厳形式をも認める者のこと。人を巻き込まない無害なものである限り、崇高な精神共同体(右翼)や温かい利害共同体(左翼)との一体化を尊厳のベースにしたい人は、勝手にすればよからうと考えます。

先頃ノーベル経済学賞を受けたアマティーア・センによれば、リベリズム(自由主義)の成立条件は、選択自由を増進させる社会制度を価値的に賞揚する(そうした社会制度の破壊を許容しない)こと。そうした社会制度の「範囲内」でなら、共同体との一体化もOKです。

つまりリベリズムとコミュニティニズムとは、論理的に両立可能です。私はコミュニティニズムではないけれど、リベラリストは共生条件の範囲内ではどんな選択も尊重するから、コミュニティニズムをも尊重します。ただし超えるべきでない限界条件を明示したうえですが。この限界条件を私は「二段階革命」の言葉で表現します。元来は「共産主義革命の前に、まず市民革命を遂行せよ」との立場を指すものですが、これをもじって「共同体主義を価値的に主張する前に、まずリベリズムの寛容を価値的に主張せよ」という意味で使います。

ボンクラ保守(西部邁など)とボンクラ左翼(小松美彦など)の双方に見られる、リベリズムとコミュニティニズムが両立しないという思考は、共同体概念についての無理解に起因し、その無理解はさらに共同体概念の歴史の一部由来します。

共同体とは、全生活時間・全生活空間の共有により体験枠組みを共有する者の集まりを指します。共同体の対概念は結社。共通の目的とルールに合意する者たちの集まりで、異なる生活領域に属する人が、利害によって結合する。一口で言うところ共同体は包括的、結社は部分的です。

ところがこれとは別に、個人の発達史に注目した一次集団・二次集団という対概念があります。一次集団とは、個人がそこに生まれ落ちた集団で、家族・親族など「選べない関係」を指します。二次集団とは、個人の成長につれて抜がる「選べる関係」に基づく集団です。

社会学史を振り返ると、共同体(包括性)は一次集団(選択不能性)と重ねられ、結社(部分性)は二次集団(選択可能性)と重ねられる傾向があります。でもこれは問題です。むしろ選択可能性と包括性を結合した「選択共同体」だけが、リベリズムと両立可能だからです。

私が油津ドキュメンタリーで、「あえて」漁師をする・祭りをすることで、同じ時間を共有することを「選ぶ」営みを強調したのは——たとえばいったん都会でサラリーマンや役人をやった後で「出戻った」漁師に注目したのは——実はそういう思想的な背景があるのです。

ちなみに十九世紀半ばの無政府主義者ブルードンから二十世紀初頭の社会学者デュルケームに至る、家族と国家の間にある中間集団として「職能集団」を重視する思想の流れは、選択可能性(自由)と包括性を結合した「選択共同体」に注目するものだと私は考えています。

## 物語共同体でなく強度共同体へ

私が油津で注目したのは、「あえて」という共同体の選択契機に加えて、「祭りによる共同性」という契機です。祭りには意味はありません。祭りは何も主張しません。その意味で、小林よしのりが言うような「物語（＝ウソ物語）による共同性」とはまったく違います。

「油津の人たちは、海人も陸人も一緒にあって、あるいは大人も子供も一緒にあって、縄を編み、ワラで龍神を作ります。むしろやりたい人だけがやる。そうやって同じ時間を、直接的な体験を共有しきること、**濃密なもの（強度）**を享受するのです。

ファシズムについての理論的考察の歴史が明らかにするように、こうした「強度・体感・直接性」による共同体的体験が失われたところに、「意味・物語・間接性」に基づく擬似的共同性が、言い換えれば「本源性の回復」を僭称する枢軸的国家が樹立されました。

物語ではなく体感だけに、意味ではなく強度だけに、すなわち間接性ではなく直接性だけに依拠する共同体は、そもそも定義から言って、当然大きさや範囲に限定が加わります。あまり多くの人を巻き込まず、分かりやすく言えば「顔の見える範囲」とどまるということです。

会社員ANさん、回答です。私は本質論は嫌いです。個人は一人では孤独だ、共同体に属さないと寂しいなんて、少しも思いません。高々「中にはそういう人もいる」という程度。でも

そんな人には、①ウソ物語を使わず直接性の範囲で、②選択共同体を営んでもらうしかない。

①物語は人を騙し、共生条件を侵害します。②選択共同体ならぬ自然共同体の強調は、セン（前述）がいう意味で選択自由を奪い、特に自然共同体の崩壊後はどこに生まれ落ちたかによる初期手持量の較差を永久に保存します。

リベラリストはこれを許容することができません。そこで次回、別の質問を用いて、共同性を危険なものにしがちな間接性を代替しうる、直接性についての考察を深めましょう。

Q 強度や身体感覚を引き出す直接性志向とは？

1 「自然に回帰せよ」というスローガンはインチキです。私たちが自然と呼ぶものはすべて過去の人々が入念に手を加えてきた歴史の産物です。宮台さんの「直接性」ってそういうスローガンなんですか？ (27歳・男・会社員・EM)

2 『タ・ヴィンチ』九八年十一月号「宮台&鶴見対談」の処方箋は「ダンス」でしたが、僕はクラブには行かないで、 presteteのダンスゲームにハマってます。ダメでしょうか？ (19歳・男・フリーター・JS)

3 私がいちばん幸せなのは恋人にハグされるときです。結局、愛する人と直接触れ合えないことが世の中をおかしくしているのだと思いませんか？ (32歳・女・会社員・NW)



ダンス、スケボー、ボディピアス、ボディペインティング、エステ、ダイエット、過食拒食  
……。最近の若い男女を見ると、「身体操縦」すなわち体に対するコントロール感を通じて、  
強度（濃密な体験）を獲得しようとする動きがあることが分かります。

何かを変えることでハッピーになりたいとき、昔なら「社会変革」でしたが、それが「一人  
旅」や「部屋の模様替え」になり、最後に「身体操縦」に到る。コントロール不能な領域が拡  
大する中で、身体は制御可能な最後の外部環境になっています。

一方、バブル崩壊前なら「3K」と嫌われた建築現場や道路工事の作業に従事したがる若い  
男女も増えています。井の頭線渋谷駅の高層ビル建築現場では、最上階に設置された特殊ク  
レーンを二十三歳の女性が操縦しています（速水由紀子『AERA』九八年十一月二十三日  
号）。

他方、援交ブームによる敷居低下や風俗情報誌の充実にも助けられて、現役OL・主婦が  
パートタイムの風俗労働や援交に乗り出すケースも増えています（酒井あゆみ『眠らない  
女』）。援交する女子高生の減少と裏腹に、女性全般に援交が拡散しています。

工事現場と風俗現場という異なる空間での「肉体労働」の志望者が増える共通の理由があり  
ます。それは仕事に「手応え」があること。すなわち、①身体感覚への訴えかけを通じた濃密

さ、②物ができあがる・人が歓喜するという目に見える成果です。

前回の文章で漁師町の取材で、サラリーマンや役人をやっていた人たちが「出戻って」漁師  
をするようになるのも同じ理由で、①身体感覚に訴える（生存本能を刺激される）濃密さ、②  
その日のうちに成果が分かるというその都度の達成感があるからです。

### 直接性と間接性の微妙な関係

こうした動きの背景に「成熟社会化」があります。近代が成熟すると、天井知らずの成長を  
期待できる未来の明るさが消えると同時に、人々に共有された「モノの欠乏」が埋め合わさ  
れ、何が幸いなのか・良きことなのか、人それぞれに分化します。

こうして時間的にも空間的にも不透明になると、「今を犠牲にして頑張れば、将来報われ  
る」「自分を犠牲にして頑張れば、社会に役立つ」という「今でないいつか」「ここでないどこ  
か」を当てにする生き方は、期待外れに見舞われがちになります。

その結果、成熟社会は、「いつかどこか」に向けて人々を動機づけていた「意味」や「物  
語」を、確実に風化させます。代わりに人々はますます「今ここ」における「強度」や「体  
感」に動機づけられるようになります。

かくして人々は、意味や物語によってブリッジされた「遠く」でなく、強度や体感を直ちに

引き出せる「近く」を志向し始める。すなわち人々は直接性を志向するようになります。直接性というものは「意味や物語を迂回しない」という意味です。

意味や物語を迂回しないほうが、成熟社会の不透明な環境への依存度が低くなり、逆に自己次第になる度合いが高まります。期待外れが起こっても、自分のせいだと考えられるから、やり直しが利く。直接性への志向は、成熟社会への適応だと言えます。

その意味で、直接性への志向は良きことです。ただし隣国・北朝鮮のパレードや、ナチスドイツの体育・芸術のように、直接性が、「意味」や「物語」の強化に用いられ、「共生と両立しない体制」を補完した歴史を、忘れるわけにはいきません。

直接性が、ありそうもない政治的な「意味」や「物語」を、ありそうなものとして演出するために用いられる可能性には、注意が必要です。むしろハリウッドのように娯楽目的の演劇や映画の演出に用いられるならOKですが、それでさえ政治的な演劇や映画がありません。

ことほどさように、直接性と間接性の間には、きわめて微妙な関係があります。今述べたように、(a)直接性が間接性を支える場合もあれば、逆に、(b)高度な社会システムやテクノロジーといったあたりそうもない間接性が直接性を支える場合もあり得ます。

(a)の関係は人為的な創作物を「自然」「本来」と錯覚させます。そのとき(b)の関係は覆い隠されます。成熟社会における直接性志向の増大を前にして、私たちは覆い隠されがちな(b)の関

係に対して敏感であるべきなのです。

### 「直接性⇌自然回帰」の誤謬ごびやう

直接性を自然に、間接性を文明に当てはめる考え方は、社会思想上繰り返し出現します。

高度化したシステムにより、私たちが「本来」の「自然」な在り方が「非本来的」で「自然」な在り方々と疎外されたという思考図式（⇌疎外論）です。

だから直接性（proximity）という言葉は、社会科学の伝統ではしばしば反文明的ニュアンスを伴います。具体的には「複雑な社会システムを経由しない、自給自足的なもの」や「通信・情報機器を介さずに、直接に向き合うこと」などを指しがちです。

こうした用法は、「人間本来のあり方」である自然との一体化が、都市化・文明化で失われたことを問題だと見なす考え方と一体だから、近代成熟期の「消費化」と「情報化」を目的にします。こうした思考は私たちの周囲にあふれかえっています。

たとえば鳥山敏子ら教育評論家の一部は「子供たちが喋と戯れ、花と遊ぶ自然な生活環境を失ったことがイジメの原因だ」などと説きます。しかしこれは現実を知らない空理空論です。

実際、イジメが激烈なのは、都会よりも地方の学校だからです。

なぜか。都会のほうが将来のための生産でなく「今ここ」を楽しむ「消費化」や、（必要

な)モノでなく(必要という観点からは価値のない美的な)情報への需要を導く「情報化」が進んでいるからです。要は、都会には楽しいことがたくさんあるということです。

私の言う「直接性」は、自然性とはいささかも関係なく、もっぱら強度(意味に還元できない濃密さ)や体感とだけ結びついた概念です。だから「直接性」には、複雑な社会システムや高度なテクノロジーに——消費化や情報化に——媒介されたものがいくらかでもありうるのです。

実際、直接性志向の例として挙げたダンス、スケボー、ボデイピアス、ボデイペンティング、エステ、ダイエット、過食拒食……の中には、いわゆる未開社会にも存在するものと、高度なテクノロジーを経て初めて成り立つものが、同時に含まれています。

ちなみに私は、ハンクオン、アウトラン、スーパーハンクオン、アフターバーナーI/II、パワードリフト、ギャラクシーフォースI/II、デイトナUSA、SEGAラリーなどアーケード系3D体感ゲームにハマりまくってきた天才ゲーマーです。

中学時代から格闘技(空手)にハマって「アッパー系まつたり」だった私にとって、大きく揺れる筐体かぶたてに乗り、ギャラリーギャラリーを率えつつ、3D体感ゲームに汗を流す体験は、紛れもなく「もう一つの格闘技」でした。両方も、強度に向き合う体験を与えます。

### 「直接性」人格的關係の誤謬

社会思想史を見ると、他者とのコミュニケーションについても、直接性の有無を問題にする伝統があります。メディアを通じてでない生身の他者と、匿名的ではなく相手をよく知ってなされるコミュニケーションを、直接的で本来的なものだと見なします。

こうした「もう一つの本来性の思考(『疎外論』)」は、近代社会がメディアや交通、官僚組織を発達させたことが、親密な人格的なコミュニケーションを壊し、砂粒のような孤独な大衆にしたのだという、二十世紀初頭の大衆社会論に由来しています。

でもこれは完全に誤りです。面識のない匿名の他者を「役割」だけで信頼する「非人格的コミュニケーション」と、ロマンチックな愛で結ばれる「人格的コミュニケーション」の可能性を、近代社会は「共に」拡大したというのが、今では学問的な常識なのです。

それを置いて、先の思考において「メディア的」か「生身的」かという対比と、「匿名」か「非匿名」かという対比は、実は別のロジックです。これをクロスさせて四象限図式を作ると、五五頁の図のようになります。この図をヒントに考えてみます。

常識的には、メディアに媒介された匿名なもの(テレクラやインターネット)が最も親密さから遠く、逆に見知った人間との生身の接触が親密さに近いと考えがちです。しかしこれは、現実をまったく知らない人たちの考えです。それでは現実はどうか。

私は「匿名的な親密さ」と呼びますが、テレクラ的・コスプレ(イメクラ)的コミュニケーション

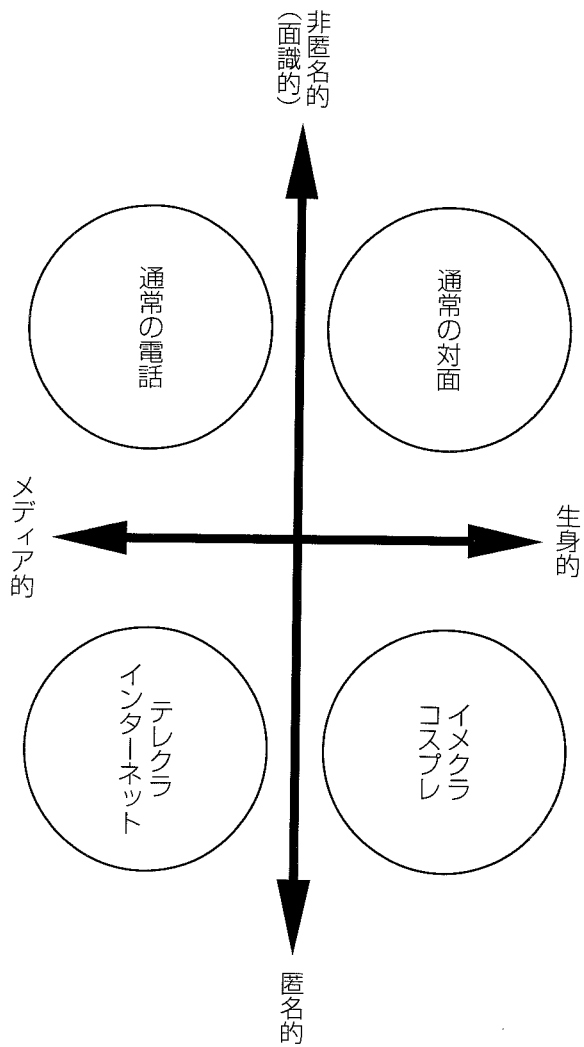
シヨンは、直感的な言い方ですが「普段よりも裸になれる」コミュニケーションで満ちています。恋人に喋れないことをテレクラで喋り、普段明かせない欲望をイメクラで承認される。これを「親密さ」と呼ぶかどうかは言葉の問題ですが、美味おいしいとかワクワクするといった「意味に還元できない濃密さ」が、むしろ「非匿名」よりも「匿名」の、あるいは「生身」よりも「メディア」を通じたコミュニケーションで生じうることは、極めて重大なことです。

一つは「匿名」のほうが名前と結びついたマイナスイメージに脅えなくて済むので心を開きやすいという「尊厳上の要因」がある。もう一つ「生身」だと交換される情報量が多すぎて自己表出に失敗しがちという「印象操作上の要因」があります。

不透明性と流動性の高い成熟社会に特有の、こうした尊厳上・印象操作上の困難ゆえに、逆に、こうした困難を乗り越えるという落差経験が「生身」の「非匿名的」コミュニケーションの喜びを増大させることもありえますが、それは副次的な問題です。

**「直接性」の厳密な用法へ**

男性会社員EMさん。お説の通り、近代成熟期の社会では、自然は、自然のまま残しておくことを選んだ、文明的な（自然）です。私の言う直接性は、反文明的な自然回帰ではない。文明的なものを含みますが、文明的な（自然）に限られもしません。



男性フリーターJ.S.さん。実際に全身を動かすダンスも、手先を動かすだけのダンスゲームも特に選ぶところはありません。意味を介さず強度に向き合う直接性は、最終的には大脳生理学の問題だから、究極的には電極やクラスリでも代替できるはずです。

最後に女性会社員NWさん。恋人にハグされるのも確かに濃密な体験でしょう。でも自己改造セミナーやイメクラで知らない人にハグされるのも（場合によっては一層）濃密な体験です。インターネット・ラブで究極のときめきを感じる人がいることも事実です。

結論。強度（意味に還元できない濃密さ）の観念は、社会思想的には直接性として語られてきました。それは「自然回帰」「匿名メディア批判」といった、それ自体極めて近代的な本

来性の思考（疎外論）と結びつきがちでした。これは問題です。

共同体主義者は、前に述べた「自然共同体」「物語共同体」を自明視する錯誤に陥りがちなだけでなく、今しがた述べた二種類の「本来性の思考」に滑り落ちがちです。共同体主義がリベリズムとの両立を目指すなら、こういう思考を徹底的に排するべきです。

すべてが制御対象・選択対象となった近代社会では、本来性は意味的に捏造された物語でなくとも「本来性の思考」とは決別する必要があるということです。

